

There構文の関係節の歴史的発達

内田脩平

1. 導入

Prince (1981) や Erdman (1980) によれば, there構文のように情報が少ない場合や, have や get など意味的に弱い動詞の補部で, 通常は認められない主格の関係代名詞が省略されることがある。本稿では McCawley (1981, 1998) に従い, (1) のような関係節を疑似関係節 (Pseudo Relative, 以下PR) と呼ぶ。以降必要に応じて下線で関係詞の空所を, 角括弧で関係節を示す。

- (1) a. There was a piece of four-inch bone [____ never mended].
 b. I had a great-great-grandmother or something [____ fought that Revolution].
 c. We got a lot of fancy Cadillac car [____ don't tip]. (Prince (1981: 247))

PRのうちthere構文に後続する主格関係代名詞の省略は, there構文が発達する中英語期から英語史を通じて見られる。

- (2) ther was noo creature after that tyme [____ sawe him iape ne lawghe]
 'There was no creature after that time saw him to deceiue or laugh'
 (CMAELR4, 13.350/M4)

一方で、(3) に示すように、there構文の関連要素が空所となり、there構文自体が関係節になっている場合も関係詞の省略が起こる。(3) のタイプの関係節を Carlson (1977) に従い、Amount Relative (以降AR) と呼ぶ。

(3) Every man ____ [there was on the life-raft] died. (Carlson (1977: 521))

(2) に示すようなthere構文に後続するPRは中英語期から生産的であった一方で、(3) のARはかなり新しい構文で、後期近代英語期以降に見られるようになる。一方で、一見するとARに類似した配列は、中英語期から観察されている。

(4) Monie oðere þer beoð [þe ____ comeð of weole & of
Many other there are that come of wealth and of wunne] delight

‘There are many others that come from wealth and delight’

(CMANCRIW, II.149.2018/M1)

(4) の例では、there構文の関連要素が文頭に置かれ、there + be動詞という語順が後続しているため、(3) のようなARにも見える。しかし、後続する角括弧で示した節は、補文標識þeに導かれているため従属節である。また従属節内では主語が空所となっていることから、この節は関係節であることがわかる。つまり、前半Monie oðere þer beoðの部分が主節である。一方で(3) のARは、there構文が関係節を形成し、文末のdiedが主節の動詞であり、(3) と(4) は全く別の節構造を持っている。本稿では、there構文の主節性の低下によって、(4) のタイプの関係節から(3) のARが発達したと主張する。

本稿の構成は以下のとおりである。2節では、(1a) のようなthere構文に後続する関係節は統語上従属節であるが意味上主節であるとするMcCawleyの議論を概観する。その後、(3) のthere構文自体が関係節となっているARに関する議論を概観する。3節は2節で概観した2種類の関係節とthere構文の歴史的な発達を歴史コーパスの調査を基に明らかにする。3節の調査結果をもとに、

4節では2つの関係節の関係性を明らかにする。5節は結語である。

2. There構文と関係節

本節では, there構文に関わる2種類の関係節の統語的な振る舞いを概観する。1つはthere構文に後続する関係節で, McCawley (1981, 1998) が疑似関係節 (Pseudo Relatives) と呼ぶものである。もう1つはthere構文自体が関係節になっている例で, Amount Relatives (Carlson (1977)) や Degree Relatives (Heim (1987)) と呼ばれる関係節である。これらの関係節はともに通常の制限関係節とは異なる統語的振る舞いをし, 制限関係節と区別されるべきと主張されている。

2.1 Pseudo Relatives

McCawley (1981, 1998) は, PRは統語的には従属節である一方で, 意味的には主節であると述べており, (5a-d) の文はそれぞれ, (5a'-d') の解釈をもつ¹。

- (5) a. There are many Americans [who distrust politicians].
 a'. Many Americans distrust politicians.
 b. Paul has a brother [who lives in Toledo].
 b'. A brother of Paul's lives in Toledo.
 c. Nixon is the only President [who has ever resigned].
 c'. Aside from Nixon, no President has ever resigned.
 d. I've never met an American [who understood cricket].
 d'. In my experience, no American has ever understood cricket.

(McCawley (1998: 462))

McCawleyは, PRが通常の制限関係節とは区別されるべきである根拠としてPRと通常の制限関係節が異なる統語的振る舞いをすることを観察している。1点目に, PRの先行詞の話題化(6b)は, 通常の制限関係節(6a)の場合よりの容認度が上がる²。

- (6) a. * The fish, Bill ate ____ [that I caught]. (McCawley (1981: 105))
 b. ? Many Americans there have always been ____ [who distrust politicians].
 (McCawley (1981: 106))

2点目に、制限関係節は先行詞 + 関係節を話題化できるが、PRでは容認度が下がる。

- (7) a. The fish [that I caught], Bill ate _____. (McCawley (1981: 105))
 b. ??Many Americans [who distrust politicians] there have always been _____.
 (McCawley (1981: 106))

3点目に、制限関係節は先行詞と関係詞の間に挿入句を入れることはできないが、PRは可能である。

- (8) a. * Tom cooked a dish, as you know, [that I always enjoy].
 b. There are many Americans, as you know, [who distrust politicians].
 (McCawley (1981: 106))

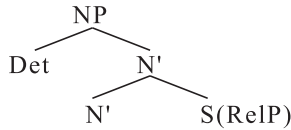
4点目に、制限関係節内からの抜き出しは許されないが、PRからの抜き出しは容認度が上がる。

- (9) a. * Which company is Alice dating a man [who works for ____]?
 (McCawley (1981: 107))
 b. ? Violence is something that there are many Americans
 [who condone ____]. (McCawley (1981: 108))

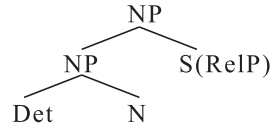
また、McCawleyは(1)のような主格関係代名詞の省略もPRの特徴であると述べている。

McCawley (1981) はこれらの違いを制限関係節とPRの構造の差で説明している。

(10) a. 制限関係節



b. PR



(10a) に示すように、制限関係節はNバーの補部を占めるが、PRはNPに付加する。また、PR自体は意味的に主節であると仮定することで(6)-(9)の違いを説明している。まず、(6)で見た制限節が先行詞のみ話題化できないのはDet+Nバーという非構成素の話題化となるためである。PRの場合、関係節はNPに付加しているため先行詞NPのみの話題化が可能となる。同様に(7b)の先行詞とPRは、意味上は主節なので、主節全体を話題化することになり容認度が下がる。(8b)のPRの場合、挿入句が許されるのも、先行詞とは主語と述語の関係であり、意味上は主節であるため通常の主節同様、挿入句が可能である。(9a, b)の抜き出しの対比は、制限節は先行詞と複合名詞句を形成しているため、複合名詞句制約により抜き出しは許されないが、PRは主節であるため複合名詞句も形成していないという³。(1)のような主格関係代名詞の省略も、PRが意味的に主節であることで説明可能である。主節主語と述語の間に関係詞は不要であるため、省略が可能になる。

このように、McCawleyは、PRは意味上においては主節であるが、統語上は従属節にdemote(格下げ)されていると主張しており、記述的ではあるが制限関係節との差を説明している。PRが統語上は従属節である一方で、意味上は主節であるということは、統語上の主節は意味上の従属節に格下げされていることを示唆する。

2.2 Amount Relatives

次に(3)のような、there構文の関連要素が関係詞化されている事例を見よう。先行詞の数量を関係詞で現わすため、Carlson(1977)は、このような関係節をAmount Relatives(AR)と呼び、またHeim(1987)は数量以外の程度(degree)

も表すとして Degree Relatives と呼んでいる。本稿では前者の用語を使う。Carlson (1977) や Heim (1987) は数量や程度が関係詞化されている様々な関係節の事例を対象としているが、本稿では AR の特徴の一つである there 挿入が可能である点に焦点をあて、there 挿入がある例のみを対象とする。

- (11) a. The people [there were ____ at that time] only lived a few decades.
 b. That's all [there is ____].
 c. What/That light [there is ____ in this painting] is quite diffuse.
 d. Any beer [there may be ____ left in that cooler] is mine
 e. Every lion [there is ____] eats meat. (Carlson (1977: 525))

PR 同様 AR は、通常の制限関係節とは異なる特徴を示すことが Carlson (1977) や Heim (1987) で観察されてきた。PR の場合、通常認められない主格関係詞の省略が認められたが、AR の場合 wh 関係詞は認められず、関係詞は空または that が用いられる。

- (12) a. * Every man [**who** there was ____] disagreed.
 b. * Those/The/Any bugs [**which** there were ____ on the windshield] were harmless.
 c. * That's all [**which** there is ____]. (Carlson (1977: 526))

このような関係詞の制限に対する Carlson や Heim の説明は以下のとおりである。AR は there 挿入があるため、Milsark (1974) の用語でいう、定性制限 (definiteness restriction) を受ける。That やゼロ関係詞の場合、関係節内の空所 (束縛変項) は、Milsark の言う Weak NP であり、there 構文の関連要素の位置と矛盾しない。一方、wh 演算子が束縛する変項は Strong NP であるため、there 構文の関連要素の位置は、定性制限に違反することになる。そのため wh 関係詞は認められない。

3. There構文の関係節の歴史

There構文は古英語期から見られるが、古英語期ではthere構文以外の存在を表す構文が頻繁に使用されていた。そのため、there構文は初期中英語期から後期中英語期にかけて生産的に使用されるようになった (Breivik (1990))。There構文が増加したことで、there構文に後続するPRも中英語期以降に見られるようになる。There構文全体の生起数と、there構文に後続するPRの生起数を歴史コーパス *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second Edition* (PPCME2), *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English* (PPCEME), *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Modern British English, first edition* (PPCMBE1) を用いて調査した結果をそれぞれ表1, 2に示す。コーパスの収録語数に差があるため、100万語あたりの生起頻度も示す。

表1 there構文の生起数と頻度 (100万語あたり)⁴

| | M1 | M2 | M3 | M4 | E1 | E2 | E3 | L1 | L2 | L3 |
|-----|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 生起数 | 77 | 144 | 608 | 551 | 1298 | 1081 | 1109 | 465 | 637 | 650 |
| 頻度 | 2708.0 | 1119.2 | 1249.8 | 2025.5 | 2158.2 | 1808.1 | 2051.0 | 1357.1 | 1592.2 | 1800.0 |

表2 PRの生起数と頻度 (100万語あたり)

| 関係詞 | M1 | M2 | M3 | M4 | E1 | E2 | E3 | L1 | L2 | L3 |
|------|-----|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| ゼロ | 0 | 0 | 5 | 19 | 12 | 20 | 27 | 6 | 6 | 2 |
| that | 2 | 4 | 44 | 48 | 106 | 57 | 63 | 15 | 17 | 10 |
| wh | 0 | 1 | 9 | 31 | 77 | 96 | 82 | 36 | 50 | 43 |
| 合計 | 2 | 5 | 58 | 98 | 195 | 173 | 172 | 57 | 73 | 55 |
| 頻度 | 7.0 | 38.9 | 119.2 | 360.2 | 324.2 | 289.3 | 318.1 | 166.4 | 182.4 | 152.3 |

表1, 2より、there構文の生起頻度が増加するにつれて、PRの生起頻度も増えていることがわかる。また、表2の関係詞ごとの生起数からわかるように、wh関係詞は中英語期以降に発達するため、that関係詞と比較すると初期中英語期は例が少なく、後期中英語期から近代英語期にかけて増加する。ここではPRがゼロ関係詞によって導かれる例を(13)-(15)に示す。(13)は後期中英語、

(14) は初期近代英語, (15) は後期近代英語からの例である。いずれの例も角括弧の関係節は関係詞を持たず, また主語が関係詞化されている。

- (13) a. For ther is a versifour [____ seith that ‘the ydel man excuseth hym in wynter by cause of the grete coold, and in somer by enchesoun of the greete heete.’]
 ‘For there is a versifier says that ‘the idle man excuses him in winter because of the great cold and in summer because of the great heat’
 (CMCTMELI, 233.C2.639/M3)
- b. Ande in that same yere there was a pynner [____ hyngge hym sylfe on a Palme Sondag].
 ‘And in the same year there was a pinner hinged himself on a Palme Sondag’
 (CMGREGOR, 184.1320/M4)
- (14) a. There is neither Tanner, Taylor, nor Parson [____ may compare with him],
 (DELONEY-E2-P1, 9.92/E2)
- b. There’s not a Day [____ goes over his Head without Dinner or Supper in this House].
 (FARQUHAR-E3-P2, 31.472/E3)
- (15) a. There’s some of my Fraternity [____ would have kiss’d that Girl],
 (STEVENSON-1745, 44.692/L1)
- b. There were a great many [____ followed him].
 (WATSON-1817, 1, 183.2656/L2)

(13)–(15) の例はいずれも関係節が先行詞と隣接しているが, 表2は関係節が先行詞から分離され, 関連要素+there be+関係節 (PR) の語順となる例も含んでいる。関係詞の種類ごとにこの語順の分布をまとめたものが表3である。最下段の割合は表2のPRの合計生起数に対する割合を示している。関連要素+there be+PRという語順は (6b) の話題化と同じ配列となり, 現代英語でも完全には容認されない。しかし, 表3に示すように, M1, M2期ではPRの全例がこの語順であり, M3期以降からPR全体の生起頻度が増加するにつれてこの語順の頻度やPR全体に占める割合も相対的に減少している。(16a) が初期中英語, (16b) が初期近代英語, (16c) が後期近代英語の例であり, それぞれ

関係節を角括弧で表し、関係節の先行詞（話題要素）を太字で示す。

表3 関連要素 + there be + 関係節 (PR) の分布⁵

| | M1 | M2 | M3 | M4 | E1 | E2 | E3 | L1 | L2 | L3 |
|------|-----|-----|------|------|------|-----|-----|-----|-----|----|
| ゼロ | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| that | 2 | 4 | 15 | 5 | 12 | 6 | 2 | 0 | 0 | 0 |
| wh | 0 | 1 | 1 | 7 | 14 | 5 | 5 | 1 | 2 | 0 |
| 合計 | 2 | 5 | 16 | 12 | 26 | 11 | 7 | 1 | 2 | 0 |
| 割合 | 100 | 100 | 27.6 | 12.2 | 13.3 | 6.9 | 4.1 | 1.8 | 2.7 | 0 |

- (16) a. **Monie oðere** þer beoð [þe ____ comed of weole
 Many other there are that come of wealth
 & of wunne]
 and of delight
 ‘There are many others that come from wealth and delight’
 (CMANCRIW-1, II.149.2018/M1)
- b. Somtyme **som outward things** ther be, compard among themselves,
 [____ haue ende;]
 ‘Sometime, there are some outward things that have ended, compared
 among themselves’ (BOETHEL-E2-P1, 38.532/E2)
- c. **Many** indeed there are, [who, without much pains or restraint, ____
 may go on very comfortably and respectably], by means of those habits
 which they have already acquired, and in consequence of the discipline
 which they have already undergone. (FROUDE-1830, 2, 26.258/L2)

関連要素 + there be + 関係節の語順は (6b) の話題化と同じ配列であり、現代英語でも完全には容認されないように、L3期には見られなくなっている。(6a) の現代英語の制限関係節で同様の話題化が認められないのは、制限関係節が先行詞と構成素を成すからであり、(6b) のPRで容認度が上がるのはPRがNP付加であるためであった (cf. (10))。話題化が認められる限り、当該の関係節は先行詞に付加していると考えられる。

(16a, c) のように補文標識やwh関係詞が顕在的である場合、これらに導かれる節は関係節であることが明らかである。一方で(16b)のゼロ関係節の場合、ここではコーパスの統語解析に従ってhaue endeを関係節としてはいるが、表層配列からはPRまたはARか判断できない。(17a) に示すように、som outward thingsが話題化されており、haue endeが関係節を形成している場合、(16a, c) 同様PRとなる。一方(17b) に示すように、som outward thingsは主語でther beが関係節と解釈される場合、(11) で見たようなARになる。表3でゼロ関係節がthatやwh関係詞の事例より生起数が少ないのは、このような曖昧性が生まれてしまうからだろう。

- (17) a. Somtyme **som outward things** ther be, compard among themselves, [_{RelP} haue ende;] (PR)
 b. Somtyme **som outward things** [_{RelP} ther be], compard among themselves, haue ende; (AR)

関連要素 + there be + PRでthere構文の統語的な主節性は、PRが補文標識またはwh関係詞が顕在的であることで保証される。

最後に、ARの通時的な分布を見ていく。本稿で調査対象とするARとは、関係節がthere構文で構成され、there構文の関連要素が空所となっている例である。ARの生起数と生起頻度を表4に示し、具体例を(18)に示す。表4はゼロ、that、whすべての種類の関係詞を含んでおり、全9例のうち、ゼロ関係詞は5例、that関係詞は2例、wh関係詞は2例であった。

表4 ARの生起数と頻度(100万語あたり)

| | M1 | M2 | M3 | M4 | E1 | E2 | E3 | L1 | L2 | L3 |
|-----|----|----|-----|----|-----|----|----|----|-----|------|
| 生起数 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 6 |
| 頻度 | 0 | 0 | 2.1 | 0 | 1.7 | 0 | 0 | 0 | 2.5 | 17.6 |

(18a) は初出例である後期中英語期の例であり、関係詞はthatが用いられている。(18b) は初期近代英語期の例で、ゼロ関係詞である。(18c) は後期近代英

語からの例で, wh関係詞が用いられている。

- (18) a. And I schall devise gou sum partie of thinges [pat þere ben] whan tyme schall ben after it may best come to my mynde
 ‘And I shall devise to you some part of things that there are when time shall be after it may best come to my mind’ (CMMANDEV, 3.34/M3)
- b. The xxiiij day of May the inbassadurs the Frenche were browth from the byshope's palles by land through Flet-street unto the quen's pales to soper, by the most nobull men [ther was a-bowt the cowrt],
 ‘The twenty-fourth day of May the ambassadors, the French, were brought from the bishop's palace by land through Fleet Street unto the Queen's palace to supper by the most noble men there was about the court’ (ACHYN-E1-H, 198.372/E1)
- c. ...that power is entirely due to the attraction [which there is between the falling body and the earth]. (FARADAY-1859, 14.135/L3)

ARの生起数は英語史全体を通じて極めてまれであり, 最も数の多いL3期でもthere構文全体の1パーセントほどである。ARは後期近代英語以降から現代英語にかけて確立したと思われる。この分布は, L3期にかけて衰退する表3のPRの話題化と対照的である。

4. There構文の主節性の衰退, 関係節の主節化

本稿ではARの出現は, PRが後続するthere構文の主節性の低下によって引き起こされたと主張する。まず, PRの話題化の構造から概観する。V-T移動が残っている時期と, 消失した時期で構造が異なることが予測される。動詞移動がある初期中英語のPRの話題化(16a)の構造の概略を(19)に示す。

- (19) **Monie odere** þer beoð þe comed of weole & of [TopP Monie odere_i [FinP þer [TP beoð_i [RelP þe comed of weole & of wunne]]]]

主節 VP 内から there 構文の関連要素が、関係節を残して話題化する。話題要素が文頭に出る場合、名詞句主語の場合は定形動詞が主語に先行し、代名詞主語の場合、定形動詞が後続する。そのため there がまだ完全な虚辞でなく、代名詞性を残しているならば there は TP より高い位置を占めると考えられる。ここでは FinP 指定部を仮定し、be 動詞は T 主要部まで移動する。関係節は便宜上 RelP と表記することにすが、ここでラベルは議論に影響しない。

次に、V-T 移動が消失する初期近代英語の PR の話題化 (16b) の構造を (20) に示す。

- (20) A woman ther was whych had had .iiii. husba~des.
 ‘There was a woman who had had four husbands’
 [_{TopP} [A woman]]; [_{TP} ther was _{t_i} [_{RelP} whych had had .iiii. husba~des]]]

動詞移動がなくなり、there は虚辞として TP 指定部に挿入される。there 構文の関連要素は話題として、(19) と同様関係節を残し文頭に移動する。(19), (20) において、関係節を導く補文標識または関係代名詞が顕在的である場合、there 構文が統語的に主節であることは明らかである。

次に、当該の there 構文の意味上の主節性について検討する。現代英語では、(5) で見たように、PR が後続する there 構文が意味的には主節を担う。しかし、(5) のような解釈が初期の英語で可能であったか判断することは不可能である。そこで、PR を伴わない there 構文における話題化の可否を、there 構文の意味的な主節性を判断する基準として取り入れる。関係節 (PR) が後続しない、there 構文単独の節からなる関連要素 + there be の生起数と頻度を表 5 で、具体例を (21) に示す。

表 5 関連要素 + there be の生起数と頻度 (100 万語あたり)⁶

| | M1 | M2 | M3 | M4 | E1 | E2 | E3 | L1 | L2 | L3 |
|-----|----|----|----|----|-----|-----|-----|-----|----|----|
| 生起数 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 3 | 1 | 1 | 0 | 0 |
| 頻度 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1.7 | 5.0 | 1.8 | 2.9 | 0 | 0 |

- (21) a. Many of these worthy house-keepers there are in Scotland,
 (JOTAYLOR-E2-H, 1, 139.C1.312/E2)
 b. A clever Girl there was in the Bar (STEVENS-1745, 48.809/L1)

(21) のようなPRを伴わないthere構文単独の話題化は、表3のPRを後続する例と比較して少ない。話題化が生産的であることが意味上の主節性を保証するとすれば、there構文の意味的な主節性は英語史を通じて低かったことを示唆する。一方で、表3に示したように、PRが後続することでthere構文の話題化が生産的になるということは、PRがthere構文の意味の内容を補うことで、主節性を高めていると考えられる。

次に、ARの出現を構造的に説明する。(22) に示すように、ARにおけるthere構文は構造上関係節であり、文頭の要素は話題ではなく主語である。

- (22) Every man there was on the life-raft died.
 [_{CP} [_{TP} Every man [_{RelP} op_i/(wh) that/∅ [_{TP} there was _{t_i} on the life-raft]]
 died]]

(19), (20) で話題であった文頭の要素が主語に再分析され、またthere構文が統語的な主節性も失うことによってARは出現する。この変化を引き起こすのは、外置関係節の衰退である。現代英語において、制限関係節の外置は限られた環境でしか生じない。(23a) のような不定の先行詞は外置が認められやすいが、(23b) のように、定名詞句の先行詞の場合、外置は容認度が下がる。

- (23) a. A man just walked in who we knew in high school.
 b. ??The man just walked in who we knew in high school.
 (Kayne (1994: 124))

一方で、初期の英語では関係節の外置は比較的自由であり、(24a, b) に示すように定名詞の先行詞でも関係節の分離、つまり外置はよく見られた(中尾・

尾馬 (1990), 岩田 (1993))⁷。

- (24) a. ær hine þa men onfunden [þe mid þam
before him the men aware that with the
kyninge wærun]
king waere
'before the men who were with the king became aware of him'
(ChronA 46, 35 (755) / 岩田 (1993: 2))
- b. **The holy** blissful martir for to seke, [That hem hath holpen, whan that
they were seke].
'To seek the holy blessed martyr who helped them when they lay so ill
and weak. (CT Prl 9/岩田(1993: 3))

PRに限らず、関係節を先行詞から分離することの容認度が下がったため、先行詞と関係節を分離させてしまうPRの先行詞の話題化が衰退する。構造的には (25a) から (25b) へ変化する。意味的主節性の基準が話題化であるとする仮定が正しければ、there 構文が意味上の主節性をさらに下げることになる。また、文頭の要素はすでに話題ではないので主語として再分析される。これに伴い、there 構文は主語を修飾する関係節に再分析され、後続する動詞が母形節の動詞として再分析される。結果としてthere 構文は統語的な主節性も失い、後続する節が統語上も意味上も主節に格上げされる⁸。

- (25) a. [_{TopP} Top_i [_{TP} there be t_i [_{RelP} wh_i/op_i that [_{TP} t_i ...]]]]
↓
b. [_{TP} Subj [_{RelP} wh_i/op_i RelP that there be t_i...] (AR)

5. 結語

本稿は、一見別々の構文に思われる、英語の2種類のthere 構文に関連する

関係節が、歴史的には一方の構造から発達したことを歴史コーパスの調査より明らかにした。主格ゼロ関係節が後続するthere構文の主節性が弱いことはMcCawley (1981, 1998) などの観察から知られている。表2で示したように、PRが後続するthere構文自体は英語史を通じて中英語期から観察された。そのうち、(6b) のような話題化は表3に示すように中英語期から後期近代英語の途中までは可能であった。しかしこの話題化は関係節と先行詞が分離してしまう外置関係節となるため、制限関係節における外置全体の衰退により、これまで話題とみなされていた要素が主語とみなされるようになる。主語に後続するthere構文は関係節に再分析され、統語的な主節性を落とした結果、相対的に後続する節が意味的にも統語的にも主節としてみなされるようになり、ARが出現する⁹。

注

¹ Lambrecht (1988) やden Dikken (2005) も (1) のような主格ゼロ関係節において、関係節が従属的でないと主張している。

² 査読者より、(6b) と (7b) において、there構文の関連要素は新情報であり、焦点ではないかとの指摘を受けた。McCawleyは (6a, b) と (7a, b) における容認度の差を先行詞と関係節が構成素を形成しているかに還元している。本稿の分析でも当該の前置が話題化か焦点化かは分析に大きな影響を与えない。しかしPRが (5a'-d') の意味になるのであれば、統語上there構文の関連要素であったとしても、通常のthere構文と同様の焦点でない可能性がある。

³ McCawley (1981) では、複合名詞句制約について具体的な定式化を行っていない。(9a) の制限関係節からの抜き出しより、(9b) のPRからの抜き出しの容認度が高いのは、先行詞とPRが意味上では主語述語の関係であり、複合名詞句を形成しないからである。(cf. 河野 (2012: 128))

⁴ 歴史コーパスの時代区分は以下のとおりである。M1 (1150-1250), M2 (1250-1350), M3 (1350-1420), M4 (1420-1500), E1 (1500-1569), E2 (1570-1639), E3 (1640-1720), L1 (1700-1769), L2 (1770-1839), L3 (1840-1914)。なお、there構文は古英語期から存在するが、PRの出現時期に合わせて中英語期以降のデータを提示する。

⁵ 注3でも述べたように、文頭への前置が話題化でなかったとしても本稿の分析には影響をあたえない。表3には一般的に話題要素とみなされない不定名詞句の前置の例も含む。

⁶ 同様の調査については Ingham (2001) や Kojima (2017) も参照。

⁷ 岩田 (1993) では、関係節の外置を古英語、中英語、現代英語の区分で調査している。中英語期までは制限関係節、非制限関係節いずれの外置も頻繁に観察されたが、現代英語では制限関係節の外置は制限されることを観察している。本稿表3で見たように、関連要素+there be+関係節の配列は、中英語期以降漸次的に減少しているものの、外置の衰退と並行的であるかは今後検証する必要がある。

⁸ 外置の衰退によって話題化が衰退した後、後続するthere構文が関係節とみなされるようになるのはthereが本来関係詞の用法をもっていることが関係するかもしれない。thereは関係副詞として、現代英語のwhereに対応する用法が古英語期から存在していた。宇賀治 (2000) によれば、場所を表す関係詞として古英語期から16世紀ごろまで使用されていた。

- (i) a. 7 þy ilcan geare hie fuhton wiþ Brettas þær
and the same year they fought with Britons there
mon nu nemmeþ Cerdices ford
people now named Charford
'and in the same year they fought against the Britons at a place which
people now call Charford' (AS Chron A 16.1-3/宇賀治 (2000 : 266))
- b. In þe church þær sche dwelled was a preyste which had no conseytin hir
wepyng
'In the church where she dwelled was a priest who had no favourable
opinion on her weeping'

(The Book of Margery Kempe 166.2-3/宇賀治 (2000 : 266))

(ia)は古英語期の例であり、ここでþærは先行詞を含んだ関係副詞である。また(ib)は中英語期の例で、(ia)とは異なり、cherchを先行詞とする関係副詞である。関連要素+there beの配列が、話題化から関係節への再分析を駆動したと考えられる。

⁹ 本稿の分析は(12)で見たようなARにおけるwh関係詞の制限に通時的な説明を与えられない。しかし歴史的には(18c)で示したようにARにおいてL3期という比較的新しい時期にwh関係詞が利用されている。また Heim (1987: 36-37) はwh関係詞を認めるかは方言差があることも示唆している。

参考文献

- Breivik, Leiv E. 1990. *Existential There: A Synchronic and Diachronic Study*, Oslo: Novus Press.
- Carlson, Greg N. 1977. Amount Relatives, *Language* 53: 520–542.
- den Dikken, Marce. 2005. A Comment on the Topic-Comment, *Lingua* 115: 691–710.
- Erdmann, Peter. 1980. On the History of Subject Contact-Clauses in English, *Folia Linguistica* 1: 139–170.
- Heim, Irene. 1987. Where Does the Definiteness Restriction Apply? Evidence from the Definiteness of Variables, in *The Representation of (in)definiteness*, ed. by E. Reuland and A. ter Meulen, 21–42, MA: MIT Press.
- Ingham, Richard. 2001. The Structure and Function of Expletive *there* in Pre-modern English. *Reading Working Papers in Linguistics* 5: 231–249.
- 岩田良治. 1993. 「関係節構文の史的変化」『天理大学学報』第44巻2号, 1–19.
- Kayne, Richard. 1994. *The Antisymmetry in Syntax*, MA: MIT Press.
- Kojima, Takanori. 2017. *A Study of the NP-There-Be Construction and Its Diachronic Change*, Master Thesis, Nagoya University.
- 河野継代. 2012. 『英語の関係節』東京：開拓社.
- Lambrecht, Knud 1988. There Was a Farmer Had a Dog: Syntactic Amalgams Revisited. *BLS* 14, 319–339.
- McCawley, James D. 1981. The Syntax and Semantics of English Relative Clauses. *Lingua* 53: 99–149.
- McCawley, James D. 1998. *The Syntactic Phenomena of English*, 2nd ed. Chicago: University of Chicago Press.
- Milsark, Gary. 1974. *Existential Sentences in English*, Doctoral Dissertation, MIT.
- 中尾俊夫・児馬修. 1990. 『歴史的にさぐる現代の英文法』東京：大修館書店
- Prince, Ellen. 1981. Toward a Taxonomy of Given-New Information, in *Radical Pragmatics* eds by P. Cole. 223–255. New York: Academic Press.
- 宇賀治正朋. 2000. 『英語史』東京：開拓社.

コーパス

- Kroch, Anthony and Ann Taylor (2000) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English*,

Second Edition (PPCME2), University of Pennsylvania, Philadelphia.

Kroch, Anthony, Beatrice Santorini and Ariel Diertani (2010) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Modern British English*, First Edition (PPCMBE1), University of Pennsylvania, Philadelphia.

Kroch, Anthony, Beatrice Santorini and Lauren Delfs (2004) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English* (PPCEME), University of Pennsylvania, Philadelphia.

Synopsis

On the Historical Development of Relative Clauses with *There* Existential Constructions

Shuhei Uchida

The purpose of this paper is to clarify the development of English Amount Relatives (ARs). This paper shows from a survey of historical corpora that the two types of relative clauses, Pseudo Relatives (PRs) and ARs, which appear to be different from each other, are developed from the one of the two structures. It is known from the observations by McCawley (1981 and 1998 among others) that the status as the main clause of *there* constructions is weak. However, Early English allows topicalization of the antecedent of the relative clauses followed by existential *there* constructions. This yields an ordering “associate NP+there be+relative clauses (PRs),” which is not allowed in Present-day English. Though this prohibited ordering (associate NP+there be+relative clauses (PRs)) was allowed from Middle English to Late Modern English. However, because a restriction to the extraposition of relative clauses arose, topicalization of the antecedent of PRs declined. As a result, *there* existential constructions were demoted to subordinate not only in semantically but also in syntactically. Due to the demotion of *there* existential constructions, the relative clauses got promoted to the main clause, which results in an emergence of ARs.